

# RadioDays



## ラジオデイズ

声には、  
人の体温があり物語がある

7

July Edition  
2007, vol.2  
Free of charge

月刊「ラジオデイズ」7月号（通巻第2号）  
2007年7月8日発行  
【発行人】赤塚祐一郎  
【編集人】大森美知子  
【発行所】株式会社ラジオカフェ  
東京都新宿区新宿1-6-5 シガラキビル 6F  
Email: info@radiodays.jp FAX: 03-5356-8281

この人の声が聴きたい◎7月

## 毎日二万人の読者から、 二万枚の目鱗を落とす 大学教授

内田樹さん（現代思想家）



ウチダタツルをご存知だろうか。タカダワタルではない。ウチダタツルである。現代思想に興味のある方なら、難解なレヴィナスや、レヴィ・ストロースや、ミシェル・フーコーを「寝ながら学べる」ように解説してくれる「現代思想の料理人」としての内田樹その人であろう。

また、関西の大学関係者であれば、神戸女学院大学の教務部長として辣腕を振るい、大学の地盤沈下を文字どおり身体を張って食い止めている「ビジネススマインドを理解する名物教授」といえば、「ああ、あの先生ね」ということになる。

あるいは、古武道の関係者、とくに合気道関係者なら、独自の身体論（「複素的身体論」）を展開する理論家としての内田樹を知っているかもしれない。さらには、養老孟司（解剖学者）、大瀧詠一（ミュージシャン）、高橋源一郎（作家）といった異分野の達人との名対談がある。

しかし、この当代の売れっ子も、商社マンやエンジニアの間では、「それ、誰？」といった感じで、意外と知られていない。それだけ、日本人の文化的な嗜好も多極化分散しているということである。

知っている人は知っているし、知らない人は知らない。当たり前のことを言っているようだが、これこそこの書き手が今、匂である

ということの証左であると言いたいのである。つまり内田は、現在進行形の生々しい言葉を紡ぎだしているということだ。その証拠に uchida.com という彼のブログを覗いてみてほしい。ここでは、毎日一万人の読者が、彼の書き付けている日記風のエッセイを読み、そのたびに目から鱗が落ちるといふ体験をしているのである。

作家にとって、これはある意味で地獄である。というのは、読者もまた、自らの目から鱗が落ちることを期待して、彼のブログを毎日訪れてくるからである。内田樹は、その期待をもちろん知っている。しかし、彼の凄さは、それをプレッシャーと感じるのではなく、むしろ楽しんで、読者との間に共感的な関係を作り出すことができるということである。

さて、ウチダタツルを知らなかったビジネススマン諸君。たとえば、彼の次のような語り口を聞いてみてはどうだろうか。（誰も言わなかったが、言われて見ればそのとおり。これが内田節なのです。）

——労働というのは、本質的に「私ならざるもの」にたいする贈与である。だが、それは「私ならざるもの」が実は「私自身」であると勘違いしなければ成立しない。私が贈りものをする相手は私自身である。そう思わなければ人間は贈与しない。

平川克美（ラジオデイズプロデューサー）

## ラジオの街で逢いましょう

ラジオデイズでは、声と語りの魅力を求めて、ラジオ番組も制作・放送しています。それが深夜のトーク番組『ラジオの街で逢いましょう』です。毎回さまざまな分野で活躍中の個性的なゲストをお迎えして、その方ならではのエピソードや深みのあるお話をおうかがいしています。

「放送」ラジオ関西 毎週火曜日の深夜、24時半から午前1時まで。

今後の放送予定（7～8月のゲスト）

- 7月
- 3日 青山 南（英文学者）
- 10日 園田榮治（歌舞伎解説・雑俳宗匠）
- 17日 穂村 弘（歌人）
- 24日 原質真紀子（ジャーナリスト）
- 31日 内田 樹（現代思想家）
- 8月
- 7日 増子信一（編集者）
- 14日 大岡 玲（作家）

パーソナリティは、ラジオデイズのプロデューサーの平川克美、菊地史彦、ディレクターの大森美知子、そして大阪は「お田のスーパーマルチエディター」江弘毅が務めます。アシスタントは、五十川藍子と浜菜みやこ。これまでの放送分は、ただいまラジオデイズのティザーサイトに、ストーリーミング放送中です。真夜中の語らいに、ぜひ耳を傾けてみてください。

<http://www.radiodays.jp>

9月オープンラジオデイズの「対話の街」からは、内田樹のダイアログ・シリーズがリリースされます。気鋭の思想家・内田樹氏と、悪ガキ時代の盟友ラジオデイズ・プロデューサー平川克美とともに、輝々たるお客人をお招きして語り尽くします。最初の対話のお相手は、作家の高橋源一郎さん。題して「高橋源一郎 vs 東京ファイティングキッズ」。お次のお相手は、哲学者の蟹田清一さん。ほか続々。乞うご期待！

# オリン。パスシンクくる寄席

「日時」7月4日(水)午後6時45分開演(午後6時15分開場)

「場所」お江戸日本橋亭(半蔵門線 銀座三越前)

すべての落語は新作として生まれ、生き残ったものが古典になる……、そんな過酷な道に進んで身を捧げる人々がいます。それは新作落語の演者です。時代の流れから生み出された一席の斬を、口演を重ねながら書き換えていく。そんな現代の落語ばかりをコレクションしました。毎回二人の演者が新作落語を二席ずつ競演します！

## 林家しん平

(はや・しんひ)

林家三平入門、三平没後こん平門下へ。一九九〇年真打昇進。趣味は、フィギュア、怪獣、ヒーロー、自主映画制作では特撮もこなす。路上火災の消火に務め感謝状をもらうなど落語会のヒーローを地で行く。鮫も逃げ出す迫真のパフォーマー、心優しき格闘派！



## 春風亭栄助

(しゅんぷうてい・えいすけ)

春風亭栄枝に入門、一九九九年二ツ目昇進、現在に至る。趣味は、「においかぎっこ」とやや怪しいが、最初はイヤでもだんだん引き込まれ、終いにはやさしい気持ちを手繰り寄せてしまうという。古典落語のDNA変換で世界を驚愕させる、やさしい国際派！



# 明烏い話



連載第3回

本田久作

冥土から安藤鶴夫が電話をかけてきて、「この前、志ん生の新作落語を聞いたんだよ」と私に言う。その話題には食指が動かないこともなかったが、私は安藤鶴夫のことが前々から嫌いだつたし、そもそもどういうわけでアソツルがわざわざ私に電話をかけてきたのかその魂胆がわからない。なんと返答してよいかわからず黙っていると、「だけど、やはりいいのは三木助だ」と言うので、その時ようやくアソツルが私に電話をかけてきた理由がわかった。私は最近ことあるごとに三木助の悪口を言っている。

ときに作家と斬家がコンビを組むことがある。私が知るかぎり、安藤鶴夫と三木助はその不幸な形であり、小佐田定雄と枝雀は幸せな組み合わせであった。アソツルは落語を芸術にしようとして、そのために三木助を利用した。三木助は芸人ではなく芸術家になった。本当に芸術家になったのかどうかは判断の難しいところだが、すくなくとも三木助はアソツルの薫陶のおかげで芸術家を目指すようになった。そのことについて私には文句はない。さまざまなスタイルの落語があればいいし、芸術家を気どる斬家がいてもよい。ただしそれは落語の本流であってはならない。落語は所詮落とし斬であり、だからこそ美しい。

円生は自分のことを芸人であつて芸術家ではないと断言した。何故なら「あたしは芸は

使うが、術は使いませんから」だ。円生は恥を知っていたし、見栄を張るぐらいの見識もあつたからこう言ったのだろう。とはいいえ、当人が言っていることほどあてにならないことはない。円生は明らかに芸術家を目指していたし、事実芸術家であつた。談志はその著書『文句と御託』の中で自分の意見を指して「これを芸術家の愚痴という」と書いているから、自分のことを芸術家と思っているのだろうが、当人にとって残念で客である私にとっては幸いなことに談志は芸術家ではなく芸人である。

芸人と芸術家の違いは落語に関して言えば文学性が鍵になっているようだ。どういうわけかどの時代でも一部の人たちの間で落語を文学に格上げしようとするもくろみがある。そういう人たちは落語を文学と対等のものとみなし、ひどい場合には落語は最初から文学を越えているなどと無駄なヨイショをする。無意識のうちに落語を文学よりも一段低いとみなしているからこそ、わざわざ落語を文学に匹敵するものにしたがっているのだ。落語と文学は似ているところはあるが、犬と馬ほどに違う。つまりは女と男ぐらいかけ離れたものである。同列に論じること自体がナンセンスなのに、アソツルはそのことをまるでわかっていない。そして哀れな三木助はそのせいで時々ひどく混乱している。

円生が芸人から芸術家になってしまったのは、彼の円朝崇拜が原因である。円朝は意識せずに文学に片足をつっこんでしまった人で、円生は円朝のその無意識を意識化した。そういう意味では円生と宇野信夫は幸せなコンビであつた。宇野信夫は落語と芝居と文学を本当に同等に見ていた稀有な人だつたからだ。ところが安藤鶴夫はそうではない。彼にとつ

て落語は文学よりも下なのだ。だからこそ親切にも落語を芸術にするために尽力し、三木助を芸術家に仕立て上げようとした。アソツルが電話口の向こうから、三木助の芸がどれほど粋かを延々と語っている。私はあくびを噛み殺しながら、それでも相手に失礼にならぬよう適当に受け答えをする。落語を芸術だと思っている人の話は、いつ聞いても退屈だ。

●はた・きょうぞく

一九六〇年大阪府生、ライター。二〇〇二年の「私の遊び」が国立演芸場台本募集佳作受賞以来、落語、漫才など新作台本関係の賞を毎年総ナメの業界注目の新進作家。主な受賞作「玉手箱」(国立演芸場台本募集優秀作)、「儂の葬式」(接摩の夢)、「幽霊蕎麦」(いずれも落語協会優秀賞)など。

## 私の「讚犬」ばなし 三遊亭遊雀

吾「熊の皮」

高座にかける斬はたいがい自分でこんな斬を演りたいと決めて稽古つけていただいて、という順序だが、たまに人から「こんな斬を演つてみたら？」と言われて持ちネタになることもある。この斬もそんな斬。それも得意ネタになっている。出合いはつくづく不思議なものだ。

式「紺屋高尾」

大好きな斬。この斬を演っているときは男としてとても幸せなピュアな気持ちになれる。世の中いろいろあつて、それは今も昔もおんなじだけど、この気持ちだけは持ちつづけていたい。この斬がみんなに愛されるかぎり、世の中きつと大丈夫！ っと思える。

参『牛ほめ』

前座のころ。落語会のと、文治師匠と帰ることに。丸の内線の車内で「今日さ、牛ほめ演つてたね、ちょっと違うんだよねー、えーっとね」稽古が始まった。まわりのお客さんはケラケラ笑つてる。終点の池袋到着でピタッとサゲた。車内万雷の拍手。師匠ビョコッと帽子を持ちあげてご挨拶。忘れられない思い出。

### 第3回 ラジオオーディオ落語会

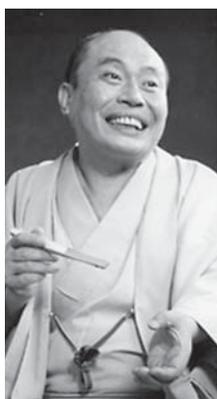
【日時】7月13日(金)午後7時開演(午後6時半開場)  
【場所】ライブカフェ・アゲイン(東急目黒線 武蔵小山)

江戸時代から明治時代に作られ、数多の噺家によって高座にかけられ、時を経て世相に洗われて、そして語りつがれてきたのが古典落語。それを自家葉籠中に演じきる現代の噺家たち！ 人情の機微に触れ、免疫力増進の涙と笑いの宝庫、至福の話芸の真剣勝負。開口一番は、毎回気鋭の二つ目さんにお願います。

## 瀧川鯉昇

(なまわ・りしよ)

九代目春風亭小柳枝に入門、昭和五四年、柳昇門下へ。平成二年、真打昇進、一七年に改名。平成八年、文化庁芸術祭優秀賞他多数受賞。趣味は、旅行。特技は、食べられる野草の見分け方。不思議な浮遊感にみちたジェットコースターのような展開がたまらない魅力。



## 入船亭扇辰

(いりふねてい・せんち)

入船亭扇橋に入門、平成一四年、真打昇進。平成十、一一年と連続で、つらん飛切り落語会で努力賞、一三年には奨励賞受賞。独特の乾いた渋みのある声で、べたつかない江戸前の語り口が粹である。趣味は、読書にギター。幅広い興味が噺の地平を広げている。



## ●お囃子 松本優子

(まもと・ゆうこ)

## 立川志の吉

(たちかわ・しのきち)



平成九年、二ツ目昇進。立川志の輔の一番弟子。爽やかな口吻と八の字眉毛が老若男女を問わず好感度抜群。子供を演じると明らかに何かが降臨する。多くの落語会に継続的に出演するなど、真摯な努力を重ねる若手ホープ。

## こみちが行けば

女流二ツ目の修行日乗①



柳亭こみち

サランラップの芯、ハタキと靴べら。入門当初の私がいちばん仲良くしていたグッズだ。みんな、太鼓の稽古に使う物ばかり。

入門しても、噺家は落語の稽古をしているだけが能じゃない。噺を覚える前に学ばなければならないことが、修行中には沢山ある。我が柳亭燕路門下は、太鼓が満足に叩けるようになるまで噺を教えてもらえないのだ。

寄席の太鼓は前座が叩く。太鼓の叩き方ひとつにも芸心が表れ、太鼓の下手な噺家は噺も上達しない、と言っ人もいる。前座として働くようになると楽屋は覚えなければいけない事だらけ。太鼓だけでも先に覚えて、後の労力を減らそうという燕路方式だ。

毎日の掃除をしながら、師匠の家は太鼓の稽古場となった。締め太鼓と大太鼓の簡単練習法。サランラップの芯は締め太鼓のバチに見立て、座布団を叩く。テ

レック・テレック・スッテンテン。太鼓の音を口ずさむと「私は古典芸能に生きる女」と喜びが湧いてくる。ハタキをかけるときは靴べらも平行に動かし、大太鼓の稽古、ハタキをかけながら、心はドロドロドロ……。このグッズを使いこなせるようになったら、太鼓も怖くない！

寄席の一日は一番太鼓から。私の修行もまず太鼓の稽古から始まったのだ。

●りゅうてい・こみち

社会人生活を経て、平成15年柳亭燕路に入門。18年11月二ツ目昇進。趣味はピアノ、ギター、ウクレレ演奏。

## 味な脇役・話芸のきまり文句

# 酒



松井高志

落語にも講談にも酒はよく出てくる。酒飲みが出てくれば、滑稽はより滑稽に、間違いは更に大事件へとエスカレートしていくからだ。

酒のない国に行きたい二日酔また三日目に帰りたくなる

これは「居酒屋」「花見酒」等、酒飲みの出る噺の冒頭によく引用される狂歌。こういう文句が出ると、きまって「まあほどほどに飲んでおくのがよろしい」などと噺家は無難なことを言うが、「ほどほど」を躬行実践している噺家は多分いないのではないかと思われる。

酒一杯にして人酒を飲み、酒二杯にして酒酒を飲み、酒三杯にして酒酒を飲む

登場人物の酔酩のため、これから事件(しばしば不祥事)がポツポツいたしますよ、というような場合は、こんな文句(千利休の言葉であるという)がよく引用される。だんだん酒に「飲まれて」いくわけである。これは落語なら「禁酒番屋」やら「子別れ」の冒頭に出てくる。

講談ならば、「赤穂義士外伝」の「小山田庄左衛門」。赤穂浪士・小山田庄左衛門(元来やや酒乱の気味があったので禁酒していた)は、吉良邸討ち入り当日、つい酒を飲んだ(大事を前にして酒に飲まれた)ために集合に間に合わず、「不義士」になってしまった。斬り合いの恐怖から逃避しようとしたのかも。酒には十癖あり

これは講談「笹川繁蔵」(天保水滸伝)に出てくる言葉。笹川の用心棒・平手造酒が千葉周作の高弟でありながら酒のため身を過つた、というくだりにある。「一寝、二機嫌、三笑い、四勘定、五管巻き、六後引、七助平、八泣き、九盗み、十喧嘩」と、だんだんタチが悪くなる「上戸」の種類をいう。「三」の「笑い上戸」までが笑って許される範囲なのだろう。さて、あなたはどのレベルだろうか？

●まい・たかし

一九六〇年愛知県生、月刊誌編集者を経てフリーライター。著書に『半四郎の出世・十右衛門の背後』(メタ・ブレイク)、『人生に効く！ 話芸のきまり文句』(平凡社新書)など。話芸「きまり文句」辞典(サイ) <http://wagenden.coolog-nifty.com/>

### ラジオデイズ落語会 (毎月第2金曜)

【会場】Live Cafe Again (武蔵小山)  
 【時間】午後7時開演(午後6時30分開場)  
 【木戸銭】2500円

●第4回 8月10日(金)  
 五街道雲助 柳家三三 柳亭こみち

●第5回 9月14日(金)  
 古今亭志ん五 三遊亭歌之介 五街道弥助

※ご予約申込開始は各回前月1日から、ラジオデイズURL <http://radiodays.jp> もしくは、予約受付専用電話〇三―三三四―二二三〇より、先着順です。

### オリンパスシンクする寄席 (毎月1回不定期)

【会場】お江戸日本橋亭  
 【時間】午後6時45分開演(午後6時15分開場)  
 【木戸銭】2000円

●第4回 8月30日(金)  
 柳家喬太郎 瀧川鯉朝

●第5回 9月5日(金)  
 林家彦いち 三遊亭丈二

※ご予約は、オフィスM 〇三―三九九―三三三五まで



ラジオデイズは、文芸・対話・話芸を三本の柱に、声のもつ魅力に特化した音声コンテンツを制作し、ダウンロード販売するWebサイトです。飘逸で含蓄のある随筆、瑞々しい感性の横溢する詩歌や小説の朗読、個性的な対話者たちの真挚な言葉の応酬から生まれる知的交歓、粋と人情の落語や講談などなど、大人のお楽しみにもたえる魅力的なコンテンツが満載です。9月より本番サイトがスタートします、ごうご期待!

## 水無月の落語会ふたつ

梅雨なのに水無月とはこれ如何に? 第二回ラジオデイズ落語会(六月八日)の開口一番は柳家るべえさんの「金明竹」。早口な大阪弁の言いたてが命の嘶。るべえさんは、柳家喜多八師の弟子で農工大卒のインテリ嘶家彼の周りは時間もゆったりと流れる。アインシュタインにも見せたかったね。二人目、桃月庵白酒師匠は「転宅」から。妾宅に入った泥棒、お婆さん機転の夫婦約束に騙され、翌日またいらっしやいと追い返される。間抜けでお人好しの泥棒というキャラクターは師匠のハマリ役。女の狡賢さとの対比が効いている。もう一席は「長命」。マシユマロのように福々しい顔が効果的だった。

三人目、入船亭扇遊師匠は「浮世床」から。髪結い床でおしゃべりを楽しむ若い衆たちの与太嘶。静岡県は熱海の産で江戸っ子に憧れているという扇遊師匠、江戸っ子の気持ちのいい職人言葉が話せる貴重な嘶家だ。トリネタは「試し酒」。下男久造が大変な大酒飲みだといので、五升の酒が飲めるかどうか賭けることに。一杯ごとに酔いがまわり態度がでかくなる久造の変化が面白い。左党の誉れ高い師匠、いかにも旨そうに盃を空けていく。幸せそうな顔から酒の旨さが伝わってくる。

6月いまひとつは新作落語の第二回オリンパスシンクする寄席(六月二八日)。ベテランと活きのいい若手の対決。先発は古今亭錦之輔さん、役者のような名前に眉毛が印象的、古今亭寿輔師の弟子で来年には真打ち昇進だそうなの。まずは「チョココロネ政談」。政談とは政治談義ではなく、大岡越前や遠山の

金さんなど町奉行がお裁きをする嘶の総称だ。ある男が昔懐かしいチョココロネパンをしっぽから食べようとしたことから事件は起こる。身近な物事の有り得ない設定に端を発した事件の急展開に男も観客も引きずり込まれる。二席めの「甲子園の魔物」では、世界を異質なものに一変させるお手並みが見事。

さてお待ちかね昔昔亭桃太郎師匠が登場。人を食ったようなその風体は、ときに愛らしく、ときに暴力的でもある。お見合いして断られ続けた男が88回目に出逢った派手な女その正体は? という「お見合い中」。トリは十八番「裕次郎物語」。セレブな石原裕次郎の生い立ちと信州は田舎育ちの自分を引き比べながら、昔の映画や美人女優の話も交えつつ懐かしいエピソードを綴っていく。長いマクラとダジャレ、疲れたときにはこの伸び切った感じがたまらなく心地いい。師匠は一世を風靡した故春風亭柳昇の弟子で瀧川鯉昇と春風亭昇太の兄弟子、落語にもお血脈が生きているのだ。



### オリンパスシンクする寄席の"楽屋口(〇〇)"

シンクする寄席オリジナルコンテンツ"楽屋口(〇〇)"が携帯電話からお楽しみいただけます。



まずは、左の2次元バーコードを携帯のカメラで写してあらかじめ無料画像認識アプリ Sync ★ R (シンクする) をダウンロードしてください。

QRコード、または <http://gwmj.jp> (オリンパスのシンク★R公式サイト) に空メールを送信すると、ダウンロード先URLが記載されたメールが返信されてきます。つぎに、Sync ★ R (シンクする) アプリを起動して、各ページにあるマークを携帯のカメラで撮影して保存・送信すればOK。オリンパスシンクする寄席のチラシのマークでもラジオデイズのお楽しみコンテンツをお楽しみいただけます。※このとき、それぞれのマークの全体が入るように、ピントが合うところまで離して撮るようにするのがスムーズにダウンロードするコツです。どうぞ、お試しあれ!

#### シンクする (Sync ★ R) とは?

オリンパス株式会社の開発による、先進の画像認識技術を応用したカメラ付き携帯電話用アプリのこと。新聞・雑誌などの紙面やテレビ画面上の画像を撮影するだけで、モバイルサイトへのアクセスを可能にします。

## ラジオデイズの窓から

新宿御苑の木々が雨に濡れをぼっている。静かに部屋で過ごすにはうつつの季節だ。じつと眼を瞑って詩や名随筆の朗読に耳を傾けるのもよし、落語を聴きながらごろりと寝をべってクスクス笑うもよし、机に頬杖をついて刺激的な対話に聴き入るもよし。魅力的な音声コンテンツが続々と仕上がってきた。手前味噌ではない。作り手がワクワク上気するほどの出来ばえ、推して知るべし。

